
10年間待っていた想い

伝説・改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10年間待つていた想い

【Zコード】

Z1099Z

【作者名】

伝説・改

【あらすじ】

梓が結婚して、祝福する遼祐と唯。

だけど実際は二人とも色々と悩んでて……？

本作は「けいおん！」「LOVE!」「LOVE!」「LOVE!」シリーズの短編小説です。

「まさかなあ、梓が一番最初とは
「凄いよあずにゃん！わたしたちより先に大人になっちゃったね！
「ど、どうも……」

苦笑いしながら梓は唯の祝福っぽい言葉にお礼を言った。
「いや～、でもなあ……うん、おめでとう梓」
「さつきからそればっかりだぞ律」
「でも確かにそれしか言えないぐらいの感動だつたわ～」

隣にいた律と澪と紬もそんな感じで梓の幸せを祝福した。
そつ、なんと放課後ティータイムの一一番下の後輩である梓が、結婚
しゃがつたのである。

お相手はなんと科搜研の人だつて。
どんな感じで知り合つたかは知らんが、とりあえず俺は素直に祝福
した。
……読者のみなさん、お相手はもう誰か分かると思いますがあえて
口には出さない事にしちゃいます。はい。

「あずにゃん、すっごく綺麗だつたね～！」

結婚式の帰り。周りは既に真っ暗であつた。
唯と二人で俺たちは家路についていた。それにしても、なんかテン
ションがこいつさつきから上がりっぱなしなんすけど。

「だつて～、結婚だよ～。わたしも早くそんな人が欲しいな～！」

……ああ、そうだね。

つたく、人の気も知らないでそんな事を……。

結局、俺はいつまで経ってもこいつに付く合はぐだいすらまともに言えなかつた。

ずっと仲のいい友達のまま。今の関係より先に進めなかつた。多分、今の関係がここち良いのかかもしれない。
だけど俺には、それが満足できない。満足と言つかるまい。
とにかく、俺は結局唯には好きという一言が言えなかつた。
大学も一緒だつたのに、卒業しても言えなくて。いつのまにかもう俺たちも25歳。

……もう10年くらい会って、それくらいになるのに、そのまま変われなかつた。なにやつとるんだ俺は。バカじやね？ホント自分の情けなさに溜息が出る。

「りょうくんにもそんな人はいないの？」
「ああ……いないんだよなあ……これが」

いるだろうがバカ。
隣に。
今話しかけてきた奴。

……ああ、なんかバカラしくなつてきた。

「うん、大丈夫だよ。
「んじや付き合え」

俺は唯の手を引いて、歩き出した。

「たっくよ~、なにがけつこんだちくしょ~ーーー。」

あれ？なんか立場が逆じゃね？

おかしいよ。俺がそういういたかつたんだよ。なんで君が言つてんの？

「あずにゃんのばか～！もうじらないもんね～！！ひつく……」

今こるのは俺の家。

コンビニで買つて来た酒を広げて俺はやけ酒をする予定だった。

なのに何この状況。俺が言いたかつたんだよああやつて。

なんどよ？俺全然酔わない。どうして？

……いや、あいつがただ酒に弱いだけか。ビール缶一本であれだ。飲ませるんじやなかつた。一人で飲めば良かつたチクショー。

「あ～もう、しらない！わたしはどうすればいいんだ～！！」

「どうもこうも、そういう奴を見つけりやいいだろ」

これは明らかに自分に言わなければならぬ事であつて、人に言つべきことではない。

それにしても唯さん、あんた未だに恋人もいなひんつすか。今さらだけど。そして俺の言えた事じやないけど。

「ふうんだ、わたしはギー太と仕事がこいびとだもん～！」

「……仕事が恋人つて」

なんつー古い表現。つい笑つてしまつた。

「あ～、わらつた～！」

「だつて、仕事が恋人つて……ブブブ」

「もひ、ゆいちゃんおこつたぞ～～！」

そう言って、唯は酔つた勢いなのか、いきなり俺に抱きついてきせがつた。

そしていつのまにかベッドに俺が押し倒されている風景になってしまった。

……なんてことだ。こんな事があつてもいい訳?

「分かった、俺が悪かつたから離せ唯

「……やだ」

「やだじやない」

「やだ」

「離せ

「やだ」

「……」

「わつお好きでビーツい。

「つようくさん……」

「なんだよ……」

唯の顔を見た瞬間、俺は頭が真っ白になつしきだつた。

その顔は少し赤くなつていた。酒の影響か。

だけど、それが色っぽく見えて、俺の理性が少しあがれていた気がした。

「……びつして

「……」

「どうして、なんだるうつね……?」

「何が

「寂しかつたんだよ。わたし

「だからなにが

やつぱり酔つてゐる。

本氣でそう感じた。

「……言つてよ、りょくへん」

「なにを」

「……りょくへんの、気持ち」

「……へ？」

ダメだ」つや。完璧に酔つてゐる。

しかも、俺も。あんな幻聽まで聞こえちまつたよ。

……幻聽じやないなあれ。どう考へてもこいつが本氣で喋つてた。

「ずっと待つてゐるのに、何にも言わないんだもん、りょくへん……」

「唯……、お前……」

「大好きだよ、ずっと、好きだったのに……りょくへんの事……」

その瞬間、頬に何かが零れ落ちた。

唯の涙だつた。唯の瞳から、光る雫が零れ落ちていた。

それはどんどん激しくなつていき、つこには唯は俺の胸にしがみついて声を出して泣き始めた。

……なにやつてたんだ俺。こいつを苦しめてんじゃ ねえか。

10年間も、待たせちゃつたんだじゃ ねえか俺は。なんてバカな野郎だ本当に。

「……唯」「……何？」

顔を上げて、唯は上田遣いでこつちを見てきた。

……可愛すぎる。こやいや落ち着け。

俺は、勇気を振り絞って、それを口にした。

「……結婚しよう、唯

「……うん

「絶対に、幸せにするから。10年間待たせた分、何百倍にして返してやる

「……うん

「……ありがとうございます、唯

「……うん

それから数カ月。

「まさか唯とお前がね……まあ予想はしてたけど

律が悔しがるように呟く。へへへ、まあまあ。俺たちが見事に2番目取つてやつたぜ。

「二人とも、幸せにな

「うん！ ありがとうね、澪ちゃん！

白いウエディングドレスに身を包んだ唯は、笑顔でそう言った。

……俺つて幸せ者だな、おい。

さうして数年後。

「パパ～！」

「どうしたんだよ

「ママが呼んでたよ！」

「唯が？なんかしたかな俺」

「りょうく～ん！...掃除手伝つてよ～...」

「え～、めんべいせいからバスね～！」

「10年間待たせた分倍にして返すつて言つたのは誰だったかな～？」

「...」

「行こうよパパ、ママのお手伝いしようつよ～」

「...分かつた。んじや、行くか」

「うん！ほら早く早く！」

「待つて、走るとこかるぞ、柚～！」

「ゆつちや～ん、りょうく～ん、早くして～！」

「ああ、分かつた分かつた。いま行くから...」

子供も出来た。

名前は日暮柚。

ゆいとりゅうすけの子供だからゆいつて、なんともも離りじこネーミ

ングだ。

まあ俺も異論はなかつたし、それに決定した。

...唯と出会いて15年。

これからも、こいつと、柚とずっと一緒にいる。
だから、これからもよろしくな。

遼祐「わ～、バカ！柚！服引っ張るな～～の！唯も一緒になつてするな～～！一人して押し倒すな～～！」

律「……どんな夢見てるんだこ～～」

澪「それに誰だよ柚つて……」

浩史「でもすつじく幸せそうな顔だね」

紬「ホント。起こしてあげるのが可哀想なぐらい」

和「でも起きないと練習行けないでしょ？それに唯も起きないと

……」

唯「ゆつちや～ん、ママといっしょにパパと遊ぼうね～～

律「……ゆつちやんと柚つて同一人物なの？」

梓「せんぱ～い～～早く練習きてください～～～～～」

続きを読む

(後書き)

あんなオチでいいません。
だけどこれを正史にしちゃつたら本編終了しちゃうので……（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1099n/>

10年間待っていた想い

2010年10月9日02時42分発行